慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	太田さんのご逝去を慎む
Sub Title	
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.4 (2009. 4) ,p.191- 193
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事 : 太田俊太郎先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20090428-0191

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

太田さんのご逝去を悼む

法学部の同僚であった太田俊太郎名誉教授の訃報が学部長秘書室からＦＡＸで届いたのは、昨年四月の下旬に入って何日か過ぎたある日のことであった。添え書きには、すでにご葬儀は済まされたとのことです、とあった。太田さんにお別れの挨拶をする機会をもてなかったのは大いに心残りであったが、その一方で、ひそかに逝ってしまわれるというのは、いかにも太田さんらしい気配りだという感懐も、覚えたものである。

太田さんとは同じ法学部の教員として三十数年をともに過ごしたが、あくまでも慎み深く、遠慮深く、そして謙遜家であって、日常接するなかで、自分というものを強く押し出して他人を困惑させるなどということは、まったくなかった。

私が太田さんを知ったのは、大学四年の「英書講読」（当時の名称は「研究指導Ⅱ」）の授業のときであった。その授業に一度だけ、大学院修士課程一年の太田さんが出席され、授業終了後に会話を交わす機会を得たという次第であった。

太田さんと再会したのは、それから二年余り後の昭和三十四年四月、私が会社を退職して大学院修士課程に入学したときであった。多分、私の指導教授であった石川忠雄先生の研究室で再会したのだと思うが、すでに法学部副手になっていた太田さんは、私のことをよく覚えていてくれて、それ以降、キャンパス内での交流が次第に密になっていった。

その後、博士課程一年時の昭和三十六年秋に、私は法学部助手に採用されることが内定したが、実は、助手に応募する決意をしたのは、その前年の秋の太田さんの「なぜ助手に応募しなかったのですか。私は期待していたんですけどね」という一言が、私の背中を強く押したからであった。太田さんの一言に勇気を貰って、私は思い切って石川忠雄先生に自分の希望を伝え、石川先生、伊藤政寛先生のご尽力があって、幸運にも地域研究（アフリカ）担当の法学部助手という、当時の政治学科としては全く新しい専門分野の教員として、昭和三十七年四月に着任することができたのである。

人生とは出会いだと、つくづく思う。私なども人生の

節目節目で良い出会いに恵まれ、今日にいたっているが、そのもっとも重要なひとつが太田さんとの出会いであった。

幸い太田さんとは、第一研究室棟の同じ研究室で机を並べることになり、交流はいっそう深まった。太田さんはあまり自分について語らなかったが、実は当初音楽家を志し、慶應へ入学する前に音大に在学したことがあるとのことで、三畳間（四畳半だったかもしれない）の下宿にピアノを置いて、その下で寝起きしていたという回顧談を聞いたことがある。北区上十条の自宅の二階にある書斎には立派なグランドピアノが置いてあったが、その演奏を聴く機会がなかったのは、心残りである。

太田さんと音楽とのかかわりはその人柄からして別段不思議ではないが、バイクを飛ばす姿は、だれしもちょっと想像しにくいだろう。あるとき太田さんは軽井沢に別荘を構えたが、しばらくはバイクで軽井沢―東京間を往復していた。カミナリ族ならぬ「カミナリオヤジ」です、と照れくさそうに笑っていたのを、懐かしく思い出す。

万事に控えめな太田さんであったが、法学部の学部改革問題では、真っ向から正論を唱えて容易に引き下がらなかった。振り返ってみれば、昭和四十年代を中心に吹き荒れた学園紛争の時代から、その後も続く学部改革の時代へと、我々は激動の時代を生きてきたという印象が強い。昭和四十八年秋には、「教授だけからなる教授会」は廃止され「全専任教員」からなる教授会がスタートしたが、それに先立つ一時期、「助教授以下の代表」が数名教授会にオブザーバーとして参加していたことがある。記憶が定かでないが、太田さんも私と一緒にオブザーバーを務めていたことがあったのではなかろうか。

控えめな人柄だったからといって、学校行政が不得手だったなどということはない。昭和五十二年秋から十年間、新聞研究所長としてリーダーシップを大いに発揮したことは、組織の長としての太田さんのマネジメント能力の並々ならぬ高さを充分に物語っている。

太田さんが「アメリカ政治」の分野で活躍されたのは、周知のことである。太田さんのライフワークはアメリカ大統領選挙の研究であり、その成果は『アメリカ合衆国大統領選挙の研究』（慶應義塾大学出版会、平成七年）として刊行された。太田さんがこの世を去られた二〇〇八年は、奇しくもアメリカ大統領選挙で初めて非白人（正しくは混血というべきか）であるアフリカ系アメリ

カ人のオバマ候補が勝利するという、歴史的な年になった。太田さんがご存命であったら、どのようなコメントが聞けたであろうか。大いに心残りなのである。

（二〇〇九・一・三一）

名誉教授　小田英郎

太田俊太郎先生との想い出

太田俊太郎先生が亡くなられてからすでに一年が過ぎようとしている。先生と最初に接したのは、大学院時代藤原守胤先生のアメリカ政治史の授業においてであった。助手として授業に参加され、われわれの報告に耳を傾けておられる太田先生の態度には重みがあった。

太田先生とのお付き合いはそれ以来亡くなられるまで続いた。先生はアメリカ政治（史）の研究者であるが、政治学科では地域研究グループに属し、研究と教育において同じグループの先輩として私はいつも先生に親しくしていただいた。先生はまた石川忠雄先生に私淑されており、石川先生を囲む集いでもたびたび同席させていただいた。その意味で、私は太田先生に対し強い同門意識を持っている。

私の専門領域は中国政治（史）なので、太田俊太郎先生のアメリカ政治研究の全体的評価については他の方に譲りたい。しかし、太田先生にはアメリカ政治に託した